
異常で過負荷な臆病者

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常で過負荷な臆病者

【Nコード】

N6296X

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

神の手違いで死んだ主人公、二タ子樹^{ふたしいつき}。証拠を隠すため転生させられたのは、めだかボックス??
二重人格である主人公は、果たしてどうなるのか?
(作者は、文才の欠片もないのでご了承ください)

ブログ 上(前書き)

まだ完結していないのが2つもあるのに投稿しました。
↑この作者はバカです。

ブローグ 上

「ここはどこ？」

眼鏡をかけた少年が目を覚ます。

ここは、真っ白で何もない世界だ。そして、少年の前に一人の男がいた。

「ここはどこかって？現世と冥界の狭間さ。君は、さっき死んだ。」

「????」

「死因は、交通事故。少女を助けようとしてね。」

少年は、思い出す。

数時間前

登校途中、居眠り運転のトラックが少女をはねようとした。少年は、なにを考えたのでもなく勝手に体を動かしていた。それで死んだ。

「思い出したかい？まー君が死んだのは僕の手違いでさ。君に「あのーあんだ誰ですか？」は二次げん「無視すんなー」。葬式始めんぞ。」

「ごめん、ごめん僕は神さ。見習いだけど・・・。（何だ今の殺気

「？）」

「神？？」

「そう神だ。見習いだけど……。っで話続けていい？」

「どうぞ、自称見習い紙さん。」

「紙じゃなくて神だから。後見習いを強調するな。」

「すみません。自称神さん（笑）」

「（笑）邪魔だよねー。もういいよ。っでさっきの続きね。」

「つまり、神の手^{あんた}違いで死んだ俺を、証拠を隠すために転生させるってことだろ。」

「？？（全部言われたよ。）御察しの通り。で、君^{あなた}たちのことを調べただけ、『めだかボックス』に転生してもらっよ。」

ブローグ 上（後書き）

ブローグなのに二話になりそうです。なんて、文才がないんだ。

ちなみに、ニタ子っていう地名は実際にあるそうです。

プロローグ 下（前書き）

プロローグ 2 話目です。

プロローグ 下

「御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらうよ。」

「君たちってことは人格が二つあることに気づいたか。つま、死因を思い出したところから裏が出たな。あとこのことは、アイツには内緒だからな。あとめだかボックスの世界で原作ブレイクしてもいいのか。オレのためにも、アイツのためにも。」

「はー、わかった。で、気づいているとは思っけど現世の時点であの子は、異常を持ってんね。」

「アイゲーム見稽古のことか？」

「それぞれ。で、転生するに当たってちょっとプレゼントがあるんだ。」

「何だ、それは？」

「神からの贈り物プレゼント

？お金の心配なし

？それぞれボクから異常と過負荷をプレゼントアブノーマル マイナス

？お互い5つまでお願いOK

ただし、？であなたは異常は持てない。逆も一緒。
こんなもんでどうですか。」

「まあいい。で？はなんだ。オレにはどうせ過負荷だろうが。」

「君には、裏切りの樂園を、あの子には、憎まれ知らずをあげるよ。」
トレチャリール・ティル・ナ・ノーグ
アンリセン

「面白い、じゃーそろそろ連れてってくれ。めだかボックスの世界へ。」

「OK!逝ってらっしゃい。」

「おい、字がちg」

さあ、第二の人生、スタートです。

プロローグ 下（後書き）

見稽古は、刀語の鑓七実を参考にしました。
また、裏切りの樂園は、Paradise Lost のサビから
とりました。

両方大好きです。
そして、最後に

プロローグ長!!

登場人物紹介

ふたこいつぎ
二夕子樹 表人格

性別 男

見た目 そこそこイケメン。というより女顔。
いつも眼鏡をかけている。髪は、基本黒。

一人称 ボク

年齢 16歳

好きなこと、もの 人助けをしている人
野菜

嫌いなこと、もの 人が傷つくこと
動物（魚も含む）
臆病者（自分）
肉

アフノーマル
異常
アイゲーム
見稽古

ただで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使
うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。
現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。

見た

アンリセント
憎まれ知らず

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。

ふたごいつき
二夕子樹 裏人格

性別 男

見た目 表とそう変わらない。ただし、少し目がつり上がる。
眼鏡はかけていない。髪は、基本白。

一人称 オレ

好きなこと、もの 人を傷つけること

人を貶すこと

肉

表人格

嫌いなこと、もの 偽善者

ナルシスト（誰のことかお分かりですね）

敬語

野菜

マイナス
過負荷
トレチャリール・ナ・ノーグ
裏切りの樂園

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使う

ことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることが
できる。（１人だけ）

まーこんな感じです。また、異常や過負荷は増やしていきますの
で、ある程度たまったら能力のみ紹介したいと思います。

登場人物紹介（後書き）

質問があつたのですが「裏切りの楽園」では、基本能力強化のつもりです。ただ、めだかの完成は「無限ループ」になるため不可能。また、宗像先輩の「殺人衝動」等の異常はそのまま（100%）コピーにします。

作者の説明不足です。まことにすいません。

オレからボクへ（前書き）

ついに、転生しました。

オレからボクへ

「ここは、どこだ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何だ、これ？」

『これを読んでいるということは無事転生できたんだね。もし君が裏人格なら頼みがあるんだ。机の下に表人格用の手紙があるからこの手紙を読み終わったら、その手紙を机の上においてほしい。つまり、裏人格用の手紙を読む↓その手紙を抹消↓机の下を表人格用の手紙を見つける↓机の上に置く、ってわけだ。何でこんなことをするのかというと、この世界にまだ裏人格^{キミ}は、存在してはいけな^いんだ。でも大丈夫。いつか君も原作世界にいてもよくなるから。まーそんなわけで当分君は登場しないでね。それじゃーバイバーイ。

b y 神』

「何の予告もなしにオレをこの世界に連れてきやがって、それでこの手紙か。まったく世間知らずもほどがある。（オレがいえないが）まあいい。オレは、少し寝るか。」

オレからボクへ（後書き）

最後に、

裏人格「ここは、どこだ？」

神「もちろん、箱庭総合病院ですよ。」

表人格「つ、ついに来た！。」

ちょっとキャラ壊れました（笑）

スタート 第2の人生（前書き）

二話続けて短いですねー。

あと、樹の顔を女顔にしました。でも男に代わりはありませんよ。

スタート 第2の人生

「ここは、どこ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何、これ？」

『これを読んでいるということは、無事転生できたんだね。真つ白な世界でも会ったと思うけど覚えているかい？ボクは、神さ。で、君はボクの手違いで死んでしまったんだ。だから君にはめだかボックスの世界に転生してもらったんだ。突然の話で驚いているかも知れないけど君の好きな漫画なんだからいいでしょ。この世界では、原作ブレイクしてもいいし、異常も使ってもいいよ。ちなみに君の持っている異常はアイゲーム見稽古と憎まれ知らずなんだけど分らなかったら第3話を見てね。あと、そろそろ君とのところに善吉君が来ると思うよ。その後、めだかちゃんにも会い、善吉君の名言が出るといいね。じゃ、バイバーイ。

b y 神

「ここが、めだかボックスの世界？あつ、善吉だ。」

「僕は人吉善吉。 君の名前は？ 一緒に遊ぼうよ！」

こうして、ボクの第2の人生が始まった。そして、15歳の春、旧友人吉善吉と1年1組で再会を果たす。

スタート 第2の人生（後書き）

善吉の名言の意味は分かりますよね。ちなみに、病院でめだかや襦、飛沫達にも会っていて、病院は今でも残っています。↑原作ブレイク出たー！！

また過去については、番外編としてやっていこうと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ち考えたことある

サブタイトルは、いつもこんな感じにしたいと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ち考えたことさ

15歳の春を迎えた僕は、今日もまた校門をくぐっていた。そして、常々思っている。箱庭学園でか！！

つで、今日は、異常な女が人の上に立つ日だ。そう、今日は新生徒会長発表日。

新生徒会長の黒神めだかが全校生徒の前で演説を始める。

「世界は平凡か？」

異議なし。

「未来は退屈か？」

たぶんそーじゃない。

「現実 is 適当か？」

Yes of course .

「安心しろ、それでも生きることが劇的だ！」

安心なんかできっこない。ボクなんか毎日毎日恐怖の連続だ。

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

今までの前置きは必要でしたか？

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。」

悩み事は、いえないからこそ悩み事なんだよ。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

それは、ストーカーにまで発展する。

ってなわけで、めだかちゃんの発言に一言ずつ文句を言ってみた。でもボクは、それを面と向かって言えない。そんな、臆病者が嫌いだ。

ボクは、臆病者を恨みながら1年1組へと向かう。

すると、原作と同じく善吉と一人の少女が話していた。言わずも知れたブラックホールの胃袋を持つ不火知である。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるつつつかさー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カット！あれは人の前に立つのに慣れてるんじゃないよ！人の上に立つのに慣れてんだ！」

そんな会話を聞きながら、ある問題に直面した。なぜか、二人は、ボクの席のところで話しているのだ。せめて善吉とはもつと感動的

に再会したかったが、仕方ない。

「ちょっとそこいいですか？」

「あつごめんごめん、つてお前」

（感動的ではないが、気づいてくれるだろう。）

「どっかで俺と会った？」

「つな、完全に忘れられている。まーいつか。他人のふりにて気づいたら脅かそう。実質、2ヶ月しかあの病院にいなかったし。」

「えっ初対面のはずですが。」

「名前は？」

「これって気づいてもらうチャンスだね。うん、きっとそう。」

「ニタ子樹」

「えっ！！」

「驚いてるぞ善吉。やっと気づいたんだね。」

「男だったんだ。俺はてっきり女だと思ってた。」

「私も、私も」

「これから、一緒のクラスだ。よろしく。」

「よろしく」

「ようよろしくお願いします。」

シヨックだ。完全に忘れてる。これを若年性アルツハイマー病と言わずになんと言うだろうか。

と、落ち込んでいるボクの横で善吉が「俺は生徒会には入らない。なーんて言っただかちゃんに強制連行（笑）。ここで、ボクにもうひとつの疑問が。」

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。ニタ子同級生。いや、“樹”。」

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく 上

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。ニタ子同級生。いや、“樹”。」

「おっお前生きてたのか。」

「いや、人を勝手に殺さないでくださいよ。でもなんで死んだことに？」

すると、二人が説明を始めた。

長かったのでまとめるところだ。

？病院破壊未遂の容疑者になる。（もともと、飛沫達の“偉業”を阻止しすべての罪を自分のせいとし、助けたため）

？転院指令を受ける。（いわば、追放）

？転院先は箱庭総合病院の末端施設であつたため、今まで以上の実験が行われるという話を聞く。

？二人は死んだと思い込む。

「、というわけだ。」

「でも生きててよかったぜ。でも、なんでお前が1組なんだ？1組でもおかしくないのに。あと……。」

「あと？」

「お前、いつからそのー、女らしくなったんだ。」

「善吉よ、まさか樹に恋したわけではあるないな。樹は、あくまで男だぞ。」

「あくまで、ってボクそんな女に見えますか？」

「「見える！！」」

（ハモったってことは……）

樹の頭の上に負のオーラが漂う。

「そんな落ち込むでない、樹よ。」

「だって、ボクは正真正銘男ですよ。なのに、女だなんて。」

「だから、女じゃなくて女に見えると言っただけだぞ。（こいつの心って昔から弱かったっけ？）」

「まーもういいです。で、1組にいる理由ですがまだ、理事長が気づいてないだけでたいした理由はありませんよ。」

「わかった。やっぱりお前異常なんだな。でもいいよ。こうして

昔と同じように話ができるから。」

っで、話は進み、今ボクは剣道場の前にいる。

「あ？誰だお前ら。」

「1年13組ry。」

今後面倒なのでさっさと説明すると、不信任2%の人たち（門司先輩ら）にめだかが『上から目線性善説』を披露し、それk

「おい、樹。どこ見ておる。もちろんお前も素振り千回だぞ。」

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

上（後

樹「まだここまでは、よかった。原作を読んでいるのでこの展開も予測していた。だから耐えられた。でも次回、・・・。」

さあどうなるでしょう。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下（前

祝PV3000 &ユニーク700

見た下さった方々本当にありがとございます。

今後も『異常で過負荷な臆病者と無礼者』をよろしく願います。

感想大大大募集中！！！！

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

そして、めだかが倒れる。……。っておい！！だれか突っ込んでほしいよね、ココ。あの異常の塊のような人が倒れたんだぞ。ボクの叫びで。

「すまない。ちょっとめまいがしてな。ここ数日頑張りすぎたな。」

おい、その言葉、あなたがもつとも言っではいけない言葉じゃん。（えっとー、まー原因はめまいなんだね。よかった。）

というわけで、一件落着。とは、いけないのが現実の厳しさなんだよ。今日もまた、ボクは剣道場に来た。というより、善吉に誘われ、行ってみたらこの有様である。

「お前も来たのか。もちろん来たならそれなりのお礼をしなきゃいけないーよな。」

「お礼なんて結構です。では、ボクはこの辺で。」

「お、じゃーな。いつでも言うと思ったか？甘いんだよ。」

（あと少し、あと少しで門司先輩達が起き上がる。）

「日向君？なっなんでこんな風になっているの？まずそこを教え

てもらいたい。」

「一生徒会長（バケモン女）に草むしりを頼んだんだけど、うまくいなくてねー。だから変わりにボクが草むしりをしているんだ。」

「じゃー雑草、って門司先輩方のことなんですか？」

「もちろん。あ、でもこうやって時間稼ぎしても無駄だぞ。あの女、今頃役員募集演説の真っ最中だから。」

（ココで、門司先輩の回想場面だな。いま、ボクは何を考えているのか？）

「ま、待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねーよ。たったい思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

（き、キター。門司先輩かっこいい）

「うつぜ。ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ。剣道三倍段って知ってつか？ボクはあんたらの三倍強いつて意味だ。」

（ココで善吉が立ちあが・・・らないっておい！！ココで原作ブレイクしちやってんじゃん。やっぱボクのせいかー。だったら）

「し、真剣白刃取りだと？」

「そういえば、さつき剣道三倍段って自慢してたけど、初心者ボクには初心者になるの？ほら、0×3＝0でしょ。それとも、実

力って意味だったの？ならボクがそのプライドを切り裂いてあげよ。」

そして、門司先輩から木刀を借りる。（正式には、無許可だか）

「どいつもこいつも面倒くせー。お前剣道三倍段って知ってっ面倒くさいのはあなたです。ホント、ボクが安心できるよう静かにしててもらいますよ。」ッガ」

ってことで解決です。善吉は、ボクの声で驚いたらしくそれで目が覚めたそうです。

その後、日向君も、めだかに『上から目線性善説』を披露され、無事改心（？）したとさ。

っえ！樹、キャラ変わりすぎって？あれは、門司先輩方を雑草扱いしている日向君にきれたからだよ。何が剣道三倍段だ。っと言うことを今日も言い出せず、胸に溜め込む臆病者^{ボク}だった。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

樹「サブは、ボクの心の叫びです。」

有明先輩の話は、カットさせていただきます。本当にすいません。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

ここは、食道だ。

おい、字が違っ！！食堂だよ。ブラックホール 不知火と一緒に。

なぜ、こうなったかと言うと・・・

昼食を取ろうとしたときのことだ。いきなり、善吉が

「樹、お前も今から食堂へ行くところか？もしそうなら、一緒に行こうぜ。」

「うん、いいよ。ところで、隣の人は？」

「あつ、こいつは、「不知火 半袖だよ」「ってことだ。」

「不知火ってことはまさか、理事長の孫ですか？（まー知ってるけど）」

「うん、そうだよ」

という訳で、ボクは今食堂にいる。でもなぜか二人っきりだ。善吉はトイレにいくと言いながら帰ってこない。

「あれ？善吉遅いねー。善吉には樹に言っなって言っただけだよ
っちゃうね。今日、樹のおごりってことだから。」

「えっ？今なんて？」

「だから、樹が今日の罰ゲームおじりってことだから。」

「ぜ、善吉の裏切り者————！！！」

こうして、ボクの財布から諭吉さんが一人旅立っていった。

「待つて、待つてくれー。諭吉殿。」

「何一人で言ってるの。馬鹿みたい」

そのころ、神は

「皆さん、久しぶりの登場です。こう見えても、毎日樹のことはリアルタイムで観察しているからね。で、お金の問題なんだけど、電気代とかは、何とかなるけど現金はねー。月10万しか払えないから、おごりは残り9回しかできないね。ドンマイ、樹。」

「ヘークシユン！」

「樹、風邪引いたのか？」

「うるさい、裏切り者。善吉のせいで精神病にかかりそうだよ。夜もこれじゃー眠れないじゃないか。」

「有明先輩みたいなこと言っなよ。」

「なら善吉が言わせないよう、これ以上ばくに精神的ダメージを

与えないで欲しいな！。」

「ごめん。」

「まーいつか、じゃーね。また明日。」

「おう、じゃーな。」

今日は、今日で散々な日だった。こんなときに、もしも、ボクの怒りを買ったら、またキャラ崩壊しちゃうそう。あれ、今いたのは、

「貴様。王である俺の目の前を横切って走ってよいと思っているのか？」

よし、君はボクの怒りを買ってくれた。悪いけど、きょうは、そんなに安くないからね。

「もちろん。ってか、お前誰？まさか、自分で王様気取り？マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあってもないに等しい脳みそで考える。カスごときの分際が。」

やっと、裏人格^{オレ}が登場か。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ
やっとな裏人格の登場です。やっぱ、現世でも相当嫌ってたからしか
たない。

最後のセリフの中に二人の言葉が入ってます。

だいたいオレは神だとか天才だとかいつてる奴に限って実はたいしたことない

王土ファンの方々、申し訳ございません。

祝PV5000、ユニーク1000

だいたいオレは神だとか天才だとかいってる奴に限って実はたいしたことない

やっと、裏人格が登場か。

こいつって、人間扱いしなくていいよな。そうすればオレが殺つても罪にはならないしな。というより、マジ殺してー。だから、

ざまーみる。何ならもつといたぶつてやろう。

[illegible]

「二子樹、1年1組だ。」

「1組だと??」

「悪いか?」

「いや、少しきにん『平伏せ』ッグハ!!な、何!!」

だが、王土が前を見たとき、そこには誰もいなかった。

「はー疲れた。これで、オレの恨みの1厘ほどは、果たせたな。
最後に、アイツの驚く顔見たかったなー。じゃ、そろそろ、選手交^{バトンタ}
代^{ツチ}だ。」

樹の人格が元に戻る。

「あつ、あれ王土は、どこ行つたのかなー。まーボク、あん時怖
かつたしいつか。」

そのころ神

「よく考えれば、裏人格^{アイツ}も異常、元から持ってたんじゃない。」

だいたいオレは神だとか天才だとかいつてる奴に限って実はたいしたことない

異常紹介

バトンタッチ
選手交代

特定の人間と場所を入れ替えることができる。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

樹「動物なんか二度と近づいて来るな。」

めだか「私のところには、なぜ動物が近づいてこないんだ？」

善吉「そんななら、足して二で割れ。」

樹&めだか「それができればこんな苦勞はせんわ!!!!」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

今日も、いつものようにただただ普通に登校した。だから、今日はボクにとって厄日の始まりだとはまだ気付かない。

ボクは、今生徒会室にいる。理由は、ご想像にお任せします。まー強いて言うなら成り行き。そう、成り行きでここにいる。そこに、今日もあの女がきた。

「今日も、依頼が来てるぞ。ところで、樹は、何だ？その服装。」

「これですか？ただ制服の下にじゃーズで、デビルカッター。」

「

「善吉？」

「これ、めっちゃカッターじゃん。」

「さすが、善吉。この美的センスが分かるか。まさに時代の最先端ってやつだろ？」

「確かに」

「この服は、・・・」

五分後

「・・・、というわけ何だよ。」

「確かに、デビルカッター。」

「（私には、ただ時代についていけてない気がするが。）ところで、二人とも。」

「なに？」

「今日の依頼だが、犬が迷子だそうだ。私が動物嫌いなことは二人も知っておるだろう？だから、頼んだぞ。」

そして、目撃情報のあった庭に三人は、向かう。えっ！1人多いって？それは、なんでか不知火が、ついてきたからだ。

「善吉。犬はどこにいるんの？」

「え〜と確か庭の近くで見たっていう目撃情報が・・・」

「ん？」

まさか、あれが？（知ってるから憎まれ知らずはOFFにするけど）
アンリセント

「あの犬だね」

御察しの通り、ボクらの前には、犬なんかいなかった。その代わ

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近
最後の文？字稼ぎのようで字稼ぎでない。いや、すいません。あれ
はもろ字稼ぎです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

ちよつと、今回は長めです。

「

「さつきから、二人とも犬^{モンスター}って言ってるけどあれはボルゾイという犬だよー 別名ロシアンウルフバウンド」

「「ウルフって入ってんじゃん！！！」」

二人の息ぴったり。と思ったとたん、

ガッルル！！！！

鳴き声怖っ！！

「ほら『こつちにおいでよお兄ちゃん！一緒に遊ぼうよ！』って言うてるよ」

「いや俺には『人間ども！今度俺の眠りを妨げたら噛み殺すぞ！！』って聞こえるね。」

「ボクには、『あの、善吉って言う人間と一殺し合い（遊び）たい！』って聞こえる。」

「樹。オレは、今のお前を仲間と思ってるのか？」

「うん。善吉は、今ボクの大切な^{なかま}だよ。」

「もういい。っで、本当にあいつ捕まえるのか？あきらかに死亡フラグ立ってんだけど。不知火は手伝ってくれるんだよね。」

「え？あたしが？やだよ？あたしは親友のあんたが酷い目にあう

のを笑いながら見ていただけの人間なんだから」

「お前、本当に友達か？」

「もちろん。大切な道具だよ」

「“ともだち”の字は何だよ！」

「捕まえにいくときに、これを持って行って欲しいの」

そういつて不知火が取り出したのは・・・

ソーセージ

「なるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！！」

「んーんそうじゃなくてさ！これをお腹に仕込んでね「ぎゃあああ！！！！内臓喰われたー！！！！と見せかけて実はソーセージでした」っていうギャグをやってほしいの」

「そのギャグさあ、やった2秒後にマジで食われるよな？これが、お前流道具オレの使い方か。」

「そうだよ」

「ひでえ。・・・くそっ！行くしかねえか。不知火！そのソーセージ貸せ！」

「善吉。『行くしかねえか』じゃなくて、『逝くしかねえか』で
しょ？」

「いや、まだオレの人生始まったばかりだから。」

「安心して。君が死んでも、自殺扱いにしたらうから。」

「オレ、お前にそんな恨みを買った覚えがないが。」

『へえー覚えてないんだ。この前、不知火と3人で昼食をとりに行つたとき、ボクを裏切ったくせに。』

「なー！ー！！あれは、すまなかった。オレの財布も寂しかったんだ。ごめん。」

『ボクの諭吉さん、どうしてくれるかなー。』

「わかった、金払うから。」

『いいよ。それよりも早く善吉の死に様^{まんざい}、見せてくれよ。』

「その後、善吉は、見事な死に様^{まんざい}を披露して、旅立って行つたのだな。」

「そういうことです、めだかちゃん。」

「おい、オレはまだ生きてるから！勝手に殺すな（まー死にかけたが）」

「つで、犬の確保は？」

「無理だった。っていうか、あれは犬じゃない。」

「でもこのままじゃまずいよ。近いうちに保健所が動き出すだろうし。」

「保健所だと？」

「確かに保健所行きてのはかわいそうだな。よし二人とも行くぞ！」

「だめだよ、善吉が死ぬのはいいけど、今度はボクまで死んじやうよ。」

「ふむ。樹が死ぬのは困るな。」

「おい！二人とも、オレが死んでも困らないのか？」

「もちろん（うん）」

「ち、ちくしょー。」

「いや、善吉。そこで悲しむって、自意識過剰すぎるよ。」

バキッ
！！

「何の音だ？」

「善吉の心が折れたんだよ（笑）そつとおいてあげてね。」

「ああ、分かった。では本題に戻すが、

この件は、私も動こうではないか。」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

不知火「ねえねえ、なんで途中、樹が『』で話してたの？」

作者「『』の部分は善吉へのすさまじい憎悪を表しています。」

樹「あれは自業自得だよ。まー諭吉さんの恨みってやつだよ。」

善吉「じゃあ、なんで途中からあんなに毒舌になったんだ？」

樹「あつ！善吉生きてたんだ。」

善吉「おい、作者。どうなってんだ。」

作者「ただ、単純に君を痛めつけるために、見稽古で不知火の毒舌をコピーしただけです。」

善吉「そんなかんじ」「」「うるさい！」「」「すいません。」

→これは、樹&不知火&作者

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

めだかちゃんも参加し、第二回犬捕獲大作戦モンスター決行中。

「で、なんだその格好は？」

な、なんとめだかちゃんが犬の格好で登場！（ボクは原作を知っているので驚かないが）これも、ある意味犬だよね。モンスター

「ターゲットに仲間だと思ってもらう作戦だ！動物と触れ合うにはまずこちらが動物の立場にたって考えてみるのが大切だからな」

な、なんてバカなんだ！。この人って天然だよな。というか、天然以外のなにもでもない。

「なんだ？樹。この作戦、不満でもあるのか？」

「い、いやー。この作戦のほかに何か秘策でもあるんですか？たとえば、麻酔とか。」

「ない。」

「で、ですよー。」

ボクは、今日学んだ。この人、異常であり、異常だ。てんねん

っと話している間にも犬発見！と思ったら、散歩中の犬だった。ターゲット

「しかし、あれがこんかいのターゲットか。」

「いや、絶対に違います（違うから）！」「」

誰だよ、こんなところで犬の散歩してんのは。いくら、小さいからってボクには怖い。やっぱ動物は、無理だなー。（憎まれ知らずアンリセントは、OFFにしてある。）

「この犬、かわいいなー」

「善吉、こいつがかわいいなら犬もかわいがってやれ。」
モンスター

「いや、あれとこれとは別だから。」

「だが、樹。確かにかわいいぞ。」

そういつて、犬に近づく。すると・・・。

まー、御察してください。

さっき、めだかが近づくにつれて犬が後ずさりしていたが、

「さあ怖くないぞ！ー一緒に遊ぼうじゃないか！」「」

ついに耐え切れずに、善吉の後ろに隠れたんですよ。（ボクじゃ

なくてよかった。）

と思ったのも、つかの間なーんか見覚えのある犬がボクの後ろにいたんですよ。

「い、樹、後ろ！」

「うわあああああああ！！！！」

「あれが、いぬか。^{ターゲット}さあ怖くないぞ！！一緒に帰ろうじゃないか！」

「！！！！」

残念ながら、これは、^{モンスター}犬の驚きではない。ボクの驚きだ。なんで憎まれ知らずはOFFにしてあるのにボクに懐いてんだ！。^{アンリセント}

「・・・というわけで犬は無事飼い主の元に帰りました。まあとりあえずは一件落着かなと。えーと大丈夫かめだかちゃん。生きてるかー」

めだかちゃんは、めっちゃプルプル震えてる。

「私は、あんな可愛いわんちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなくダメな人間だ・・・」

えーとめだかちゃん、まーとりあえず・・・

「えーと大丈夫か樹。自殺するのはまだ早いぞー」

ボクは、周りにどす黒い負のオーラを出していたそうだ。

「ボクは、どんなに生き物に懷いても受入れられることができないなんて、ボクはどうしようもなくダメで、クズで、底辺にしか存在してはいけない人間だ。うん、よし、死のう！」

だ、ダメだコイツ。めだかちゃん以上に自虐的になってるし・・・。
。なんだか、二人対照的だなー。めだかちゃんは、動物が好きなのに動物がめだかちゃんを苦手なものに対し、樹は、動物が苦手なものに動物が樹を好きだなんて。これこそ、足して二で割りたいね。

「それができたら、こんな苦勞はしない！！！」

そんなことで、善吉は僕たちを2時間慰めなければならなかった。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

作者「憎まれ知らず（アンリセント）の弱点発覚です。（樹だけで
すが）動物が好きになるのにON・OFFはつけないのだ」（笑）

「

樹「作者死ねーーーー」

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずに行われると案外簡単

祝PV12000、ユニーク2100

読者の方々本当にありがとうございます。感想、募集中です。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずによられると案外簡単

「あれ？ここは、どこ？」

ボクは、真つ白な世界にいた。まるで、転生のときにいたあの空間のようだ。でも、ボクは確か寝ているはずなのに。

「そうだよ、君はまだ寝ている。つまり、夢の中ってことさ。」

振り向くとそこには1人の少女がいた。

「あなたは、「知つてと思うけどボクは安心院なじみ。平等なだけの人外だよ。」ですよ。ここには、アリバイブロック腑罪証明を使つて来たのですか？」

「もちろん。でも、君に危害は与えないよ。ただ・・・」

「ただ？」

「ボクのスキルを受け取ってほしいんだ。」

「え？でも、ボクは別にスキルには困らないんです。それから、ライフゼロ無効脛で、ボクの憎まれ知らずを無効化しているみたいですけど、アンリセント無駄ですよ。」

「なるほど、君のアイゲーム見稽古は、チートだね。」

「（あなたのほうがチートだと思うんだけど。）」

「ボクも、そしてめだかちゃんもチートだけど君には及ばない。それをまだ気付いてないだけさ。」

「心読むのが好きですねー。でも、ボクそろそろ帰りますんで。」

「それじゃ、また会おうね。それから、ボクのこととは親しみをこめて『あんしんいんさん』と呼びなさい。」

「では、さよおー」

ボクは誰かに言葉を遮られた。いま、ボクの唇はボクのものではない。

「つて、なにキスしとんじゃー。ボクの、ボクの大切なファーストキスを奪いやがつて。このチートクソババアが。」

「大丈夫。これも口^{リップ}写^{サービス}しだから。」

「つて、どんなスキルをくれたんですか？」

「それは、絶対防壁^{リフレクトブロック}さ。あ、もうそろそろ時間だ。楽しかったよ、最後に……」

ボクの意識はここで途絶えた。

朝から、騒がしい目覚ましの音で起き上がる。さあ、楽しい一日の始まりだ。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずによられると案外簡単

作者「絶対防壁の説明は次回でいいでしょうか。」

樹「お、ついにネタ切れですか。」

作者「そんなことあるわけないでしょう（汗）」

結局紹介します。

リフレクトブロッカー
絶対防壁

あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

これまでのスキルのまとめです。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

二タ子樹 表人格

アブノーマル
異常

アイゲーム
見稽古

見ただけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。ちなみに、相手の技、運動能力等もコピー可能。

アンリセント
憎まれ知らず

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。（動物に対するON、OFFは効かない）

リフレクトブロッカー
絶対防壁

安心院さんからもらった。あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能。使い道として、盾、足場、食事などに使える。

マイナス
過負荷

????

二夕子樹 裏人格

マイナス
過負荷

トレチャリーティル・ナ・ノーグ
裏切りの楽園

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使うことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることがができる。（1人だけ）

アブノーマル
異常

バトンタッチ
選手交代

特定の人間と場所を入れ替えることができる。ただし、相手を認識しなければならぬ。表人格から、変わるときに使用。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

ちなみに、絶対防壁の食事とは液体（甘いもの）をゼリーに変えます。作者は、ゼリー大好きなんです。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね 上

阿久根先輩、ドンマイ。

（話を読んだら分かります。）

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね

上

えーと、簡潔に言おう。今、ボク達は柔道場にいる。もちろん、反則王こと、鍋島先輩からの依頼があつたからだ。

ちなみに、なぜボクがこんなに生徒会と生活することが多いかというと、晴れて副生徒会長になった、なーんてことはなくボランティアですよ。めだかちゃんたちにも許可を取っているのでOKなんですよ。まー実際のところ、原作での数多くの名シーンを見たいんですよ。というわけで、生徒会と一緒に行動中。

「やーやー。ようこそいらつしやいました。ウチが差出人の鍋島猫美です。本日はどーぞよろしく。」

あれが部長の鍋島さんか。どちらかというと弱そうなんだよね。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらおう！」

なんでめだかちゃんは、先輩にも敬語を使わないんだ。どう考えても失礼だと思う。

「うんうん。頼りにしてるで生徒会長！」

握手してる。なんかこうやって見ると同級生みたいだね。

「あれが反則王と呼ばれた鍋島さんか。優しそうな人だなあ。」

「たしかに。」

「ウチは、そんな怖い人やないで。あ、そういやジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。阿久根、阿久根クン。」

さすが、阿久根先輩。超美男子じゃん。ところで善吉はどうか？あの二人、犬猿の仲だし。というか、すでに善吉は、敵対オーラ放ってる。

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にあなたに会いに行くのは迷惑になると控えておりましたが、あなたとの再会を心待ちにしておりました。」

善吉は気持ち悪そうな顔で見てる。正直原作を知っているボクも気が引く。だって、さっきの言葉、誠意にあふれてるもん。

「硬苦しい真似は止せ阿久根2年生。貴様ほどの男がそのように振舞っては示しがつくまい。」

「いえ、このような振舞いを恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげです。めだかさんには感謝してもしきり」私に感謝してるのならば頭を下げるな！！もつと胸を張れ！！」は、はい！めだかさんの御心のままに！！！！」

やっぱりあの人Mだ。いや、DMだ。めだかちゃんの前だとプライドの欠片もないんですね。

「おつと再会を喜んではいけない。生徒会を執行せねば。後継者。つまり新部長の選定だったな。とりあえず貴様は特別枠だ阿久根2年生。善吉との再会を楽しんでくるがよい。」

そして、感動？の再会。

「久しぶりだね。えーとキミ誰だっけ？」

「人吉善吉ですよ。ところであなた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出してるようだな。言っておくがめだかさんの支持率が100%に達しなかったのは100%キミのせいだぞ！」

「カツ！あんまり意地悪言わないで下さいよ。有名な柔道界のプリンスさんが下級生いじめなんてファンの子が知ったら泣いちゃいますよ？」

ところで、めだかちゃんは、阿久根先輩に善吉との再会を言っていたのに、なぜボクが二人の板ばさみになっているんだ。ここ、ものすごく居づらい。

「ところで、キミは？」

「えーと、1年1組ニタ子樹です。よろしくお願いします。」

「柔道部、2年11組阿久根高貴だ。こちらこそよろしく。」

そういつて、ボクと阿久根先輩は握手をする。そういえば、さつきから阿久根先輩の顔が赤い気が。

「いやあ、それにしても一姫ちゃん行儀が良くていいなあ。キミと違って！」

「あのー阿久根先輩、言葉じゃ分からないかも知れませんが一姫じゃなくて樹ですよ。」

「っていうことは、「ボクは男です。」ごめん、すまなかつた。」

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押しただけですから。』

そのころ、柔道場では柔道部員が積みかさなって倒れていた。誰がやったかはいつまでもないよね。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね下

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押しただけですから。』

「おい、樹怖いぞ。」

『そう?。』

「オレだってお前を見たとき、真っ先に女だと思ったぞ。」

『じゃーその先輩と一緒にボクに殺されてくれる?』
あそんで

「阿久根先輩、ご愁傷様です。」

「善吉君、ボクを見捨てないでくれよ。」

『ちよつと口数が多いんじゃない?』

注意 これは、あくまで表人格です。まー女と間違えられたからこうなったんですよ（笑）

『作者も口数が多い。あと（笑）ってむかつく。』

訂正します。注意 かくかくしかじかでこうなった。

『許してあげるよ。』

「（これ、絶対意味伝わんないじゃん。）」

『無駄なつつこみいらないよ、善吉。』

「すみません。」

『そういえば、提案んだけどせっかく柔道場に來たんだから柔道で決めてよ。』

「なにを？」

『それはもちろんボクの機嫌直しに負けたほうになってよ。』

「そりゃー名案やなー。」

鍋島先輩登場！

「二人が勝負すんだったら、ウチにも提案があるで。阿久根クンが勝ったら生徒会に入り代わりに人吉クンが柔道部に入って次の部長になるってどうや？」

「そんなのm『善吉に拒否権はないよ。ついでだしいいじゃん。阿久根先輩なんだか喜んでるし。』ち、ちくしょー！！！！。」

『これで、鍋島先輩の狙いも、僕の処刑も同時に達成ですね。』

「鍋島先輩もって、鍋島先輩まさか最初っからそのつもりで投書

したんですか？」

善吉も気づいたか。（でも、半分気付いてないぞ。僕の処刑の意味を。）

「うん！人吉くんみたいながんばり屋さんはウチはめっちゃ好きなんよ！」

「オレ、負ける前提じゃん！」

「『そうだよ（そうや）』」

というわけで、役職、そして生と死をかけた柔道対決の開始です。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式！！無制限十本勝負 対 無制限一本勝負！ 阿久根クンに十本とられる前に一本でもとれたら自分の勝ちや人吉クン！」

「フン！尻尾をまいて逃げなかったことだけは褒めてやろう。ああ、でも虫に尻尾はなかったか。」

「なんですか、逃げるってありだったんですか？先に言ってくださいよ、そういうことは。」

「逃げる？そんなものありなわけなからうが。」

めだかちゃん推参！！！！・・・さっき見たときより柔道部員の山が高くなってるし。

「人吉善吉、私は貴様に負けるなどとは言わん！しかし逃げることは許さんぞ！」

確かにここで逃げるのは代償が大きすぎるぞ。プライドとか、めだかちゃんの信頼とか、命とか。

「そんなことわかってるよ！」

「・・・・・・それでは始め！！！」

さあ、どっちが死ぬかな？

「先手必勝！！！」

ドカツ！

あーもう一本とられたよ・・・

「・・・・いやーそれにしてもさすが阿久根くん、綺麗な一本やなー。」

『さすが柔道界のプリンスと言われているだけありますよね。』

「本当や。後の先取らせたら右に出るものはおらんわ。・・・ホンマ天才的でつまらん柔道や。」

『……随分天才が嫌いなようですね、鍋島先輩。』

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんや阿久根クンのこともな才能を努力で踏みにじりるためにウチは柔道をやっとなのよ。」

『努力か……。……羨ましいですね。』

「羨ましいってどういうことや？」

『いや、気にしないでください。』

「そっか、まっ黒神ちゃんのような天才は天才同士、凡人は凡人同士でつるもうやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんなかし人吉クンくれや。」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島3年生。天才などいない。あと善吉はやらん。」

ところで、二人はどうなったかな。って、善吉もう9本取られてんじゃん！

「善吉！ー！」

く、来るぞ、あの名言が。

「いつ如何なる場合においても私は貴様に負けるなどとは言わん！……だから勝って！……貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ！……！」

めだかちゃん、めっちゃ目ウルウルしてるよ。

「う……あーもうわかったよ!!! お前の泣くところなんて見たくないしな!!!」

「な、なに!?!」

ドカツ!!

「文字通りアンタの足も引つ張つてもみました。ってところで何を認めてくれるんですたっけ? 阿久根先輩」

「……………負けを認める! 一本取られたよ。」

ほんとにめだかの応援だけで勝った! (原作見てるから知ってるけど。)

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝つてしもつた……いやそれよりウチも双手狩りならウチもよう使っけど人吉クンはあんなにも綺麗に……」

「綺麗も汚いもないし天才も凡人もない。いるのはただ懸命な人間だけだ。私も貴様も何も変わらんよ。」

『善吉、よく勝つたな!』

「オレ、やっぱ負ける前提だったの? いやさ、あんなこと言われたらもう勝しかないだろう。」

「じゃー次や。」

「……次？」

「いやーニタ子クン。さっきジブン『努力かー。……羨ましいですね。』って言ってたやろ。だからウチが努力の大切さをジブンに教えてやるんよ。」

『ってことは。』

「ウチと柔道で勝負や！って言うってもさっきジブン、柔道着の着かたもあやふややったし初心者か？」

『もちろん。』

「ってことはウチは、手かg『必要ありません。鍋島先輩が勝つたらあれは免除にしますから』っそか。」

っというわけで柔道2試合目、スタート

『お互い手加減はなしですよ。』

「もちろんやで。ウチが努力の大切さを教えたる。」

「……それでは始め……！」

「いくでー、ニタ子クン。」

ドカツ！

「な、なんやと？」

結果は明確だった。ボクの勝ちだ。

『だから言っただじゃないですか、努力が羨ましいって。』

「樹、お前ほんとに初心者だよな？」

『もちろん。今日初めて見たよ。』

「でも、なんでそんなにうまいんや？阿久根クン、いやそれ以上の實力やったで。」

『柔道は、一目見た程度で十分です。』

「樹、貴様さっきから見た見たと言っているが。」

『ボクの異常は見稽古です。ボクは、努力しなくても見ただけでできてしまう。努力しない人間でなく努力できない人間なんです。』

というわけで、柔道場イベントも終了し新たな仲間？も加わる。

「阿久根先輩は、部活をやめたらしい。」

善吉が生徒会室の扉を開けると

「あー！！！！！！な、なんでお前がここに居るんだ！！！！」

生徒会室でなんか当然のように着替えてるし。
まさかあの人……

「ン？ああ人吉クンとニタ子クンか。キミを追いつめるのはあきらめたが俺はめだかさんをあきらめたわけではないのでな。」

やっぱり……

「本日生徒会執行部書記職に任命された2年11組の阿久根高貴だ。よろしくお願いします。先輩！！」

なんで、先輩なんだ。あと、

『覚悟はいいかい？ドM後輩。
ウザメン』

その日、生徒会室から絶え間なく誰かの叫び声が聞こえたと言う。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね下

少々長くて疲れた！。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

ダイレクト派というのは、面と向かって告ること。それができる人は怖いもの知らずですかね！。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

「昨日は楽しかったなー。」

「樹、やつとしゃべり方が普通になったな。」

「だって、昨日阿久根先輩がボクのために機嫌直しサンドバックになってくれたからね。っと話しているとご本人登場だよ。おはよう、阿久根先輩。」

樹たちの前には、やつれた阿久根先輩がいた。

「おはよう。」

「先輩、どうしてそんなにやつれてんですか？」

「それは、昨日君がボクを処刑したからに決まってるだろ。」

「そういえば、そんなこともありましたねー（笑）そんなに楽しかったんですか？」

「逆だよ逆。もう二度とあんなのごめんだよ。」

「先輩がボクのスイッチを押したからこうなったんですよ。」

「そのスイッチは、あと何個残ってるんだ？」

「そうですねーあと一万個弱ですかねー。」

「多すぎだよ！」

「ジョークですよ、ジョーク。あと一万個強ですよ。」

「いや、むしろ増えてるからね。」

「まー、そこはスルーで。でも、スイッチなんか滅多に押されることもないと思うよ。たとえば、Z「樹、オレ完全に今空気化してるよなー。」善吉先言わないでよ。今せっかく例として挙げようと思っただのに。」

「えっ？」

『ボクのスイッチの一つは、言おうとしたことを先に言われることだよ。善吉、ボクを起爆させちゃったね（笑）』

「（スイッチ押しやす過ぎだろ。）」「」

つということであた一人犠牲者がたのであつた。（ざまーみろ
ww）

「「おい作者、最後俺らに対する本音が出たぞ。」」

時は過ぎ、今生徒会室に4人集まっている。

「ところで、二人はなんでそんなに顔がやつれているんだ？」

「「アイツのせいです。」」

「何のこと？」

「「（普通にしらを切ってるし。）」」

「まーよい。ところで今日の依頼だが、手紙の代筆だそうだ。」

つということで、ボクはおうちに帰ろー。なんでかって？自分で言うのもなんだが、ボクの字は芸術の域に達しているんだ。もちろんうまいわけではない。ボクの字は、誰が見ても暗号だからな。

「あの一、ボク字が下手なんで帰ります。」

「ふむ？何故だ？」

「めだかちゃん。樹、字がめっちゃ汚いんだよ。こいつのノート見たら暗号！？って思ったからな」

「（善吉ナイスフォロー。）」

「ふむ。仕方ない。最近疲れているようだしな。今日は帰っていいだろう。」

「すみませんねー。では、さようなら。（原作通りか見たいんだけど、今日近所のスーパーで、特売があるからねー。お金って大事だね。）」

帰ろうとしたとき、めだかちゃんに止められた。めだかちゃんが帰っていいって言ったじゃん。

「残念だが、帰らせんぞ。樹が、スーパーの特売だけで人を見捨てるような人間だとは思わなかったぞ。」

「（な、心読まれた！？）いやだなー、さっき善吉が言ったようにボクは字が下手なんです。皆さんの足手まといにならないためでもあるんですよ。」

「樹、こんなときのためにお前の異常があるのだろ。ほら、二人とも樹を逃がすな。」

「何すんですか。」

「私の字をしっかりと見るがいい。」

こうして、ボクは字が上手くなってしまった。

ということで、八代先輩の代筆作戦、決行です。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

かなりの原作ブレイクですねー。

祝PV22000

ユニーク3500

ご愛読の方々、本当にありがとうございます。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

「ところで、なんでボクの字を上手くしておきながら、阿久根先輩の監視役なんですか？」

「阿久根書記の初仕事だからだ。しかも、樹はまだ字が上手くなっておらんぞ。丁寧な字というのわな、「もう、いいです。」そうかそれならよかった。では、二人とも任せたぞ。」

つというわけで、今ボクたちは八代先輩のところにいる。

「ラブレター！？」

阿久根先輩が不思議そうに聞き返した。さすがに失礼だと思うが・・。

「そーだよ！書いてほしいのはラブレターだよ。何か文句あんのかよ！」

「す、すみません。」

なんとという八代先輩の威圧感。いろいろな意味ですさまじい。

「あたしもさ、自分でわかってんだよ。あたしみたいなガサツな女が愛だの恋だのちゃんちゃらおかしいな！でも好きになっちゃならどうしようもねーじゃん。」

「そうですね、あなたのいう通りです。八代先輩。」

阿久根は俯いてボソツと言葉を発した。どうせ昔の自分と照らし合わせているのだろう（笑）

「わかりました！黒神めだか率いる生徒会執行部書記としてどんな男でも心を動かさずにはいられない最高の名文を仕上げて差し上げます！！！」

「お、おう。まあ、よろしく頼むぜ！」

と、まあ一件落着になる。 なーんて展開は待っていない。

ドンマイ、阿久根先輩。

そして、阿久根先輩が書き終わって生徒会室に戻ってきた。ところで、今回ボク完全に空気化してるよねー（泣）

「書き終わりました。確認してくださいめだかさん。」

めだかがかなり冷めた目で本文を読んでいるように、ボクには見える。原作を知っているせいかな？

「……………」

「いやー大変でした！なにせ女子の気持ちになって恋文を書くな

ど初めての経験だったものですから。

しかしその甲斐あってかなりの名文が仕上がったと自負しております！」

お見事、阿久根先輩。見事めだかちゃんを怒らせるなんてばかな奴め。（まーボクもセリフがない時点で運がないが。）

「・・・つまり、文面も貴様が考えたわけだ。」

「ええ！どうでしょう！よければ早速八代先輩に届けてきますが「阿久根書記！！」！？」

「八代3年生が意中の男に伝えたいのは言葉か気持ちかどっちだ？」

「・・・え？」

「貴様の字で、貴様の文章で、伝わるものとは一体なんだ？」

そう言うためだかは立ち上がりドアに向かって歩き出した。

「え・・・あのしかし、代筆してくれというのが依頼なのですから「思い上がるな。人が人に代われるものか！」・・・。」

「八代3年生は困ってるのではない願ってるだけだ。問題などないのに問題を作り出しているだけだ。

貴様ならそんな彼女を諭してやれると思っていたがな。貴様には絶望した、もう何もなくていいぞ。

」

そう言つとめだかは部屋から出ていった。部屋には冷たい風が流れた。

「あーあ、めだかちゃんとは相変わらず身内には容赦ねーな。」

善吉、いかにもオレにはカンケーねー、みたいなセリフを言うな。

「ま、気にしちゃダメですよ。アンタは何も間違っちゃいない。例によつてめだかちゃんが正し過ぎるだけ」黙れ、俺は虫に慰められるほど落ちぶれてはいない!」・・・」

「そして一度や二度拒絶されたくらいで諦めるほどできた人間でもない。」

そう言つと阿久根先輩は、書いた紙を破り歩き出した。あーボクも行かなきゃ。今度はヒトとして。

2人はドアから出て行つた。

「え・・・なつなにこれ!??」

教室にいた八代先輩の前に、阿久根先輩は何十冊もの本を置いた。

「見ての通りです。あなたの気持ちに相応しい字が書けるようこれから俺と練習しましょう。」

「な、何言つてんだ？あたしそんなこと頼んでないぜ？」

自分の頼んだ依頼と違うのに戸惑っているようだ。確かに身勝手だが・・・って、ボクはどっちの見方なんだ？

「頼まれてもないことを執行してこそその生徒会です。八代先輩、自分の気持ちは自分の字で伝えてこそそのラブレターでしょう。」

「・・・・・・・・・・」

大事な事に気付いた阿久根先輩ならもう大丈夫だろう。

「安心してください、出来るまで俺がとことん「うるせええええっ！！！」っげふ！」

ちょ、ちょっとタイム。なんで、阿久根先輩が蹴り飛ばされてんだ？しかも、気絶してるし。

ギロ（これは、八代先輩のにらみです。）

「何が生徒会だよ！ お前もあたしの前から消えろ！」

お前ってボクだよな？つと言うかボクしかないよね？

「これも、めだかちゃんの依頼なんで「消えろーーーーっ！！！」」

ボクは、殴りかかってきた八代先輩の拳を受け止めた。だか、手

ではない。顔面でだ。正直痛い。でも・・・

「話ぐらい聞いてくださいよ。だいたい字が汚いとしても自分で出すなら自分で書けばいいでしょうに。」

「うるせえ！！それができるなら最初からそうしてるって！！！」

「それをできるようにするために努力すればいいじゃないですか。」

「っ！！！」

これを聞いた八代先輩は抵抗を止めてビックリしたような顔でこっちを見た。

「確かに、ボクたちが書けばきれいな字で書けます。でも、それじゃ、意味ないじゃないですか。ボクはあなたじゃない。だからあなたの想いがわからない。あなたの、その本当の想いがわかるのは、あなたしかいないんです。」

「・・・・・・・・」

「汚い字であつたってあなたの想いは変わらない。それでも汚い字が嫌なら努力して綺麗な字を書けばいいじゃないですか。あなたの伝えたい、彼への想いをそのまま伝えればいいんです。」

「・・・・・・・・」

「それでも、不安だったら？その時こそ、生徒会に頼ってください。生徒会は、24時間365日活動してますから。」

「あ、ちょ、ちょっと待てよ」

廊下でノビている阿久根先輩を起こそうと教室から出ようとする
と八代先輩に止められた。

「あ、あのよ、その・・・あ、ありがとな」

「別にいいですよ、ツンデレやしろせんぱいさん。彼に、想いが伝わると言い
すね。」

八代が顔を真っ赤にしてボクにお礼を言った。

まー、そんな訳で阿久根先輩を起こしラブレター制作を行って
いたが、ついに本人が満足する出来に完成して一応依頼は達成された。

「・・・ということで依頼は達成しました。」

「うむ、終わって見れば100満点の仕事ぶりだ。見事な手際だ
よ。」

「一体何を評価されているのかわかりません。だいたい私はあま
り何もしていません。」

阿久根先輩、これは謙虚ではなく事実だからな。

「まあそう言うな、成果をあげた時は謙虚するでない。私に貴様を誉めさせる。」

そう言うためだかは椅子から立ち上がり阿久根に近付いて手を伸ばした。

「よくやったな阿久根書記、私が間違っていた。ありがとう！！」

めだかちゃんが阿久根先輩の頭を撫でながら至近距離で笑顔を見せると阿久根の頭はオーバーヒートした。

そんな訳で、生徒会に新たに一輪の花が加わった。

ところで、今回の雑談。（今回だけです。）

次の日、こんな依頼が届いた。

『昨日、八代先輩と、ニタ子君がいちゃいちゃしてたので注意してください』

また、こんな依頼も届いた。

『昨日から、八代先輩がニタ子君を見るたびに顔を真っ赤にさせています』

めだかちゃんが満面の笑みでこちらを見ている。

「樹、昨日のこと少し聞きたいのだからいいか？」

「あつ！そういえばもうこんな時間だ。帰らなきゃな」「ガシッ
！少し話を聞きたいんだが。」・・・はい、分かりました。」

そんな訳で、生徒会に真っ赤な二夕子樹という名の花が咲いた。

好きな人に想いを伝える時ってメール派？手紙派？それともダイレクト派？

作者「最後の依頼主はもちろん不知火です。樹の言葉じゃないがド
ンマイ、樹。」

樹「人間って誰でも真っ赤な花になれるんだね（笑）」

作者「壊れちゃった」

金で買えないもの？それは、命と友情だ 上（前書き）

こついのの、言つてみたかつたんです。

あと、評価ポイント100突破！！読者の方々、ありがとうございます。

今後も、感想、評価お願いします。

金で買えないもの？それは、命と友情だ　上

ところで、今ここは生徒会室である。この時期という・・・

「めだかさん、俺達の十倍は働いてるはずなんですけどね。」

「否、そんなことはない、さすがの私も最近の業務ラッシュには少し参っておる。」

そう言いながら会長ちゃんは片手2本両手4本でペンを持って書類を片付けていく。

「どこがですか？」

「勧誘期間が終わり部活動が本格化したのが大きいな。部費に関する陳情が多過ぎる！副会長はともかく、会計の不在はやっぱ痛いな。」

めだかちゃんがボクの方をまじまじと見つめる。そんな事してもボクは生徒会に入る気はさらさらない。ただ、近くに居たいだけなのだ。（これは告白ではありません。）

「元柔道部の人間として言わせてもらえば部費は一円でも多いほうがいいですからね。」

「つとここでKYが提案する。」

「こないだ完成したバカでけえ屋内プールがあっただろ。次の日曜にそこでイベント開催して優勝した部が増額予算総取りっていう

のはどうだ？」

「まー陸上部の優位は消えるけど、でもプールじゃ今度は水系の部活が有利なんじゃない？」

「カツ！、その辺はちゃんと考えてあるよ。水中パン食い競争とか水中棒倒しとか、泳ぎとあんま関係ねー競技しかやらねーつもりだし。」

「異議あり！水中だとパンがふやけて美味しくないであります」

久々の不知火の登場です。
ブラックホール

「意見するなら競争について意見しろよ！」

「何なら、普通の早食いならいいんじゃない？」

「もうプール関係なくなっちゃったじゃねえか！」

善吉は連続のツツコミで息も途絶え途絶えだ。

「プールって言うことは・・・」

「なんだよ、なんか言いたい事でもあるのかよ不知火先生。」

「言いたいこと？ないよーないない 一個もなーい」

不知火は明らかに何か言いたい事があるようだが勿体ぶっている。善吉も不知火の性格を知っているので深く追求はしない。

「ただ場所が水中じゃ、公平なんてありえないじゃない？って言
いたただけだよーん」

「まあね。めだかちゃんが居る時点で公平なんて言葉は無いよう
なもんですもんね。」

「樹、それを言ったらおしまいだ。」

善吉は、銀魂きつての地味&ツツコミ役の新八を目指しているの
か？

「でもどうかな？何せ箱庭学園の競泳部には金にうるさい三匹の
トビウオがいるからさ」

「競泳部のトビウオ？なんだそりゃ？どついうことだよ、教える
よ！」

バシッ！

「教えてください・・・・・・でしょ？」

「教えてください。」

「よかろう」

善吉、君までもMの道を歩んだらダメだ。Mは、阿久根先輩で十
分だ。

「あ、樹には無償で教えてあげるよ」

「いやなんで樹だけ扱いが違うんだよ!!」

「もちろん、人望ひとぞろいの差だよ。」

「腹立つ！確かにその通りだと思うから腹立つ。」

残念ながら、ボクは諭吉おしりさんであいつからの人望を買っているんだ。これぐらいの優遇は当然でしょ。

「3人とも特待生でその実力は折り紙つきだけどにかく金の亡者！賞金つきのレースにしか出場しないとか？お金で雇われて他校の選手として泳いだりとか！八百長なんて当たり前で独自に賭けレースを運営してるなんて話もあったねえ まあ用心しとけば？あのお嬢様は無敵であっても決して無敗じゃあないんだからさ」

「まあ大丈夫だろ。めだかちゃんに樹もいるんだからな。」

「え!？」

「めだかちゃんが生徒会として樹を出すって言ってだぜ？」

めだかボランティニアちゃんは勘違いしているな。ボクは生徒会ではなく、あくまで準生徒会なのに。

金、金、金、金いう奴は、大抵金に裏切られた奴である

水中運動会 当日

善吉 side

「陳情していた15の部活が全て参加か。急なイベントだった割にはよく集まったものだ。」

少し引き気味に思っていると阿久根先輩が話し掛けてきた。確かによくこれだけ集まったと俺も思う。やっぱりこの部活も不景気なのか。

「そうっすね、陸上部に柔道部、美術部に剣道部までいるぞ。・・・
・・・ん？」

おつかしいな。何か剣道部の最後部によく見る顔がある。いや、気のせいかな。しかも、樹スクール水着だし。

??? 気のせいではなかった。確かに樹が剣道部にいる。

樹 side

「樹、なんで居るんだ。しかも剣道部のところに？」

善吉が驚いた様子でやってきた。

「いやー、それは「おお、やはり来たか。」まずい。」

ボクが話そうとするのを遮ってめだかちゃんが現れた。

「お前なら来ると信じていたぞ」

めだかちゃんが笑みを浮かべながら言う。その顔はボクが自分のチームだと疑わない顔だ。

「めだかちゃん、残念だか樹は剣道部としての参加だ。」

善吉がそう言うためだかちゃんは笑みを浮かべた顔のまままだ目は笑っていない。殺^ヤらねる。

「・・・どう言うことか教えて欲しいものだな。」

「これは、かくかくしかじかでして・・・」

めだかちゃんは相変わらず笑っているが、殺気がさつきからすごい。って、これギヤグじゃん。まったく笑えねー。この状況マジで洒落にならないからね。

「この前、剣道場で門司先輩の竹刀を勝手に使った上に折っちゃったんです。その反省にと・・・。」

「理由はわかった。だが、私は樹と一緒にのチームじゃなければ嫌だ。」

「嫌だって言うてもどうしようもないでしょう。」

「なら私が剣道部に私財を投じるから生徒会として参加しろ。」

「なんと言う自分勝手!？」

ナイス、善吉のツツコミ。

「ちよつとめだかちゃん。」

「む、なんだ善吉？」

「樹と同じチームじゃないほうがいいかもしれない。」

「なぜだ？私は生徒会執行と共に樹と一緒にのチームで頑張る。その流れで生徒会に入らせることが出来れば一石二鳥ではないか。」

「（まだボクのことあきらめていなかったんですね。）」

「でも久しぶりに樹と戦えるじゃないか。」

「む、確かに。」

善吉がめだかちゃんを呼んで密談をしていると思ったらめだかがさつきとは違う笑みを浮かべた。今度は目も笑ってるから安心だ。

「今回は違うチームで戦おう、全力でな!!」

「こちらこそ。」

こうして両チームが分かれるときめだかちゃんが

「樹、その服装似合ってるぞ。」

『それはどうも。』

善吉と阿久根先輩が気づいたときは遅かった。

善吉と阿久根先輩は自らの無事を祈り、めだかはわくわくして、水中運動会の幕が開いた。

ここで大会の説明

・代表者3人名の参加

・男子（樹は女子扱い）にはヘルパー装着

・点数が生徒会を上回ると予算が3倍

「えー第一種目は水中玉入れです。」

司会の人がそう言った。ってあそこに不知火居ね？

「……まあいいか。とにかくこの種目は皆同点だろう。ちなみに、ボクたちチームは、ボクのほかに門司先輩、日向君だ。え！門司先輩は部活やめたんじゃないって思ってる？これは、ボクが強引に出場させた。先輩との思い出作りだよ。また、この服装は勝つため

の秘策なんだー。借りを返すためニタ子樹はプライドを捨てました。

「よーい始め！……！！！」

合図と同時にめだかちゃんが水の中にもぐった。

「あの大技、見させてもらうね。」

あれを見たかったのでボクは水から顔をだした。

ザバーン……！！

スッ

「な、なーんと生徒会チーム一気に20ポイント獲得……！！」

「ちょっと門司先輩と日向君は待っていてくださいね。」

ここで、疑問が。なぜ、ボクが見るたびに二人は顔を赤くしているのか。（まさか、ホモ？）っという事とは置いといてボクの再現の時間だ。

ザバーン……！！

スッ

「な、なーんと剣道部も一気に20ポイント獲得……！！」

このころ、ようやく皆が攻略法に気付き始め、結果柔道部以外同率一位となった。

ボクが、二人に見稽古の説明をしていると金の亡者ウツモノの声がした。

「命？そんなどーでもいーもんいらねーよ。俺達は命よりも金が欲しい！若き生徒会長様にやーわかんねーだろーけど俺達は一円に笑って一円に死ぬのさ！」

「くだらない。ボクにとって金は

憎
い。
」

金、金、金、金いう奴は、大抵金に裏切られた奴である（後書き）

作者「最後を憎いでしましたねー。ちなみにボクも札束のプールにあこがれています。」

理不尽な言い訳や逆切れも場合によれば武器になるであろう（前書き）

裏人格のマイナス、『裏切りの楽園』の補足を3話のあとがきに入れました。

それと、題名多少変えました。（無礼者削除）

理不尽な言い訳や逆切れも場合によれば武器になるであろう

「増額部費争奪！部活動対抗水中運動会！！第二回戦！水中二人三脚です！！！」

次は二人三脚か。と言ってもボクは今回出場しない。なぜなら、玉入れでめだかちゃんのコピーをやってしまったからだ。うん、みんなの視線、めっちゃ怖い。

「なーんや二回戦は二人とも見学かいな。」

登場反則王！！柔道部なべじませんばいというと、唯一玉入れで16ポイントのとこだったなー。

「私ばかりが出張つては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか？鍋島3年生。」

「まあ後輩にも出番やらんとねー。でも樹君は何で出てないんや？」

「それは、さっきの玉入れで目立つちゃったんで皆から視線が飛んでくるんですよー。」

「樹、私はそんな目線など気にしてないぞ。」

「めだかちゃんは、人の上に立つのに慣れてるからですよ。」

「確かにそーや。っで、そろそろスタートやでー。」

「さあ位置についてよおおおおい……どんっ!!!!」

競技の始まりと同時に善吉と阿久根の生徒会ペアが一気にトップに躍り出たがとても醜い絵だった

「（お互いにいがみ合って醜い。）」

「おい、樹君。剣道部も人のこと言えんでー。」

「（心読まれた!?）と言うのは?」

「生徒会の横にぴたりついているの、剣道部やで。」

「な……（泳ぎながら二人で蹴落としあってるし）」

ちなみに実況室にいる不知火は大爆笑している。しかしお互いが身体能力が高くてとても速い。

まー結局、競泳部が最後脅威のごぼう抜きをし、生徒会は惜しくも3位でした。って剣道部はというと……日向君もろ足つってんじゃん!!しかも、そんな状況でまだゴールしてないし。結果8位だった。

『（あの馬鹿コンビそんなに死に急がなくてもいいのに（笑））』

「三回戦はうなぎつかみどりです!!!」

うなぎ一匹 1ポイント

今回は、日向君が門司先輩との蹴落とし合いで足をつったのでこの種目は門司先輩がでる。え？ボクはもちろんでないよ。だって、うなぎ嫌いだもん。ちなみに、さっきの謝罪のため二人には賭けをしてもらっている。まー結果は決まっているが。

結果、猫美は9ポイントだが競泳部の1年生エース喜界島はそれを上回る13匹も捕まえた。そして、門司先輩はさらに上の14匹だ。門司先輩の勝利条件はこの種目の1位だから、日向君の負け・・・じゃない!?

「いやーいつも動物に嫌われているのに今日は、嘘の様にうなぎが寄ってきたなー。」

「めだかちゃん、だからって22ポイントは反則だろ。ほら、司会席の不知火もさすがに驚いてるし。」

な、なんと動物避けをめだかちゃんが克服し22匹捕まえたのだ。ってことあるかーーーー!!!!

「なんで、なんでなんだ？生徒会が1位なんて。」

「おい、樹落ち着け。原因はお前だ」

「は？どついうこと？」

「樹は動物に好かれ過ぎる体質だろ？」

「そうだけど、だから剣道部が1位になれると思ったんじゃない。」

「めだかちゃんは、門司先輩の近くに樹が行くと見込んで移動してたんだ。」

「それって。」

「めだかちゃんのいいところ取りだ。樹の周りに集まるうなぎを捕まえていたんだ。って樹？」

「オレのせいで剣道部の負けか！。」

「樹、落ち込みすぎだ。まだけ」「黙れ、俺は虫に慰められるほど落ちぶれてはいない」樹どうした？」

「絶対にあの憎き生徒会に勝つ！！」

「あのでどのだよ。しかも、お前達に憎まれることとしてねーし。っていうか、これジブンのミスからの逆切れって奴だよなー。って樹どこ行つた？」

そのころ、ボクたちは騎馬戦の作戦会議を開いていた。（原作を

知っているから開けました。
)

「部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうか！」

果たして勝つのは、生徒会か？それとも剣道部か？それとも・・・

卑怯者にまじめにやって勝つ　これが本当の正義は勝つって奴だと思っ（前書き

樹「サブタイトル、鍋島先輩とボクですか？」

作者「そうだよ。でも、樹君あんなこと言って実はナルシストだったりするの？」

樹「サブタイトル、ボク考えてませんから。」

作者「ごめんごめん、訂正するよ。」

『卑怯者にまじめにやって勝つ　これが本当の正義は勝つって奴だ
と思う　by 樹』

樹「だから、ボクはそんなこと言ってな――――い――！！」

卑怯者にまじめにやって勝つ　これが本当の正義は勝つって奴だと思っ

「部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうか？」

ついに、最終競技ですね。さすがに、今回ばかりは出ますよ。もちろん上で。ちなみに、二人の賭けで勝った日向君は、門司先輩に一週間敬語を使わせるそうです。日向君ってこんなSだっけ？それでは、本題に戻ります。

「では解説の不知火さんルール説明をお願いします！」

「はいはい！この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんです」

……なんと見え透いた嘘を。

「ま、構えなくてもフツの騎馬戦だよ　ハチマキの奪い合い！ハチマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格です　たっだし！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので、ここでクイズ番組的な救済ルール！集めたハチマキの数ではなく質で獲得ポイントを決定！上位チームのハチマキほど高くポイントを設定します」

剣道部は、4位なのでこの件は関係ナッシング！どうせ不知火の思惑で、生徒会と競泳部の一騎打ちが狙いだろ。って言うかも両チーム敵対関係だし……。

「それではラストバトル！位置についてよーい……どん
っ！！」

始まりと同時に競泳部と生徒会がぶつかりあった。そのころ、剣道部は、

「鍋島先輩、やはり柔道部のさくせんって。」

「さすが樹君や。そうやで。あの2チームが戦っている間に残り
13チームの鉢巻を取ってうちらが優勝や。」

「奇遇ですね。剣道部も全く同じ作戦ですよ。」

「そや、こういうのはどうや。今は休戦ってことで13チームの
鉢巻を取りきつたらここで一騎打ちや。それで勝った方が総取りや。」

「いいですよ。」

「「では、始めましょう。（始めるで。）」」

両チーム後ろのチームの鉢巻を取る。二人が話し合っている間に
鉢巻を取るうとしていたのだ。まー両チームに気付かれ、未遂に終
わったが。

「一分後」って、両チーム集めんの早!!

「剣道部もなかなかやな!」

「鍋島先輩も伊達に反則王と言われてないんですね。」

「では、行きましようか。(そろそろ行こうや。)」

両チームの距離が一気に縮まる。そして・・・

両チームとも鉢巻は頭に残っていた。が、

「うちの完敗や。」

「さすが、反則王ですね。一騎打ちでダミーを用意するなんて。」

「ジブンもなかなかやったで!。ダミーだけを的確に取るってさすが樹君ってとこや。」

「なかなか楽しかったです。いいです。柔道部の取った鉢巻はもらいません。」

「え、でもそれじゃあ・・・」

「今から生徒会と競泳部の鉢巻を取りに行きます。^{かりに}」

そのころ、2チームは・・・

「生徒会！黒神めだか！ここで突き飛ばされたーーーーっ！！騎馬も無残に崩れ！これは勝負あつたーーーーっ！！」

「甘えたことを抜かすな！たとえ貴様が地獄のように不幸でも、そんなことが命を粗末にしている理由になるか！！」

「く・・・黒神めだか生徒会長！水の！上に！立っている！！だつとおおーーーーっ！！？」

さすが、バケモノ^{めだかちゃん}。でも・・・

「あ・・・いえ違います！これは！これはああ！！生徒会失格です。」

「「「え！？」「」」

「どういうことだ？私は善吉のヘルパーの上に立っているはずだが。」

「そのヘルパーってこれですか？」

「！！なんで樹がそれを？」

「めだかちゃんが落ちる寸前に回収したんです。」

もちろん、安心院さんから見稽古した腑罪証明コペを使ってね。あれ、なかなか便利だし。

「そして、めだかちゃんは水の上に立た……されているんです。」

なぜか、めだかちゃんの足元だけ水が寒……天状……になっている。

「な、なに？」

「今回は、ボクの勝ちですね。あと、競泳部の皆さん、残念ながら今の得点は剣道部に入りますから。」

「……どういうこと（だ）？」「……」

「ほら、生徒会の鉢巻です。だから、部費を3倍にしたいならボク達の鉢巻を取ってください。あと一つ、お金よりも大切なものがありますよ。」

卑怯者にまじめにやって勝つ。これが本当の正義は勝つって奴だと思っ（後書き

次回で水中運動会を終わらせます。にしても5部は多すぎですね。

金で買えないもの？それは、命と友情だ 下

「ほら、生徒会の鉢巻です。だから、部費を3倍にしたいならボク達の鉢巻を取ってください。あと一つ、お金よりも大切なものはありますよ。」

現段階で、競泳部は1つも鉢巻を取っていないため、生徒会には勝てないのだ。

「（うわ、やめてくれや、『金より大切なものがある』は喜界島には禁句なのに生徒会長さんに続きこの子まで言うなんて）」

種子島がそう思っていると喜界島が今の感情を表すようにふるふる震えていた

「あの娘、私たちの獲物を奪ったくせに、あの発言。ムカついた！！だからあの女を私たちのためにただ働きされよう！」

喜界島が凄い形相で言う。心なしか競泳部の2人も怯えている。そして、生徒会の2人も震えている。

『今、ボクのこと女って言ったよね。』

「ボクって言ってたけどどう見たって女じゃん。」

「（あの人かわいそうだな）」

『善吉と阿久根先輩、そんな他人事のような考えはやめてくださ

いね。さもないといひ殺つちやいますよ（笑）」

「（すみませんでした。）」「

「あの娘、しゃべり方もむかつく。」

「（だから、娘じゃなくて子だって。）」「

『二人とも、うるさいよ（笑）』

「（すみませんでした。）」「

「とにかくあの娘潰そう。二人とも・・・。」

『その金の亡者たち、作戦会議は終わったかい？』

そう言ったとたん足元が崩れた。

『なるほどね。土台を倒せばボクが倒れるって思ったのか。』

甘い、甘い。』

「そんな事言ってももう終わりだから。」

『だから、そういう考えが甘いんだって。』

「く・・・剣道部！水の！上に！立っている！・・・いや、宙に！浮いている！だつとおおおーっ！？」

『めだかちゃんもこうやって立つんですよ。』

落ちるタイミングで、絶対防壁で空気を固めて足場を作っただけなんだよね。ついついってもこれはチートか。

「あなた、何者なの？」

『ボクはただの１年生ですよ。』

「これじゃー私たちの負けね。でも、あんたじゃ私たちの苦痛なんて分かるわけないんでしょうね。」

『いや、分かるよ。』

「え？」

『だから分かるって。』

「偽善者ぶってんじゃないわよ。あんた達みたいに恵まれた環境で育った人間に分かるわけじゃないじゃない。」

『だまれ！！！！』

つい反応してしまった。って、なんだか意識が……。

「おっと、危なかったねー。表人格あいつが怒るともう手に負えなくなるのに。」

「お前、誰だ？」

「俺は、皆ご存知、ニタ子樹だがなにか？」

「お前は、私たちの知っている樹ではない！！！」

「さすが、会長。俺はいつもの樹じゃないが、真正正銘ニタ子樹だ。」

「まさか、お前、」

「察しいいいねー。そう俺はもう一人のニタ子樹だ。俗に言う裏人格って奴さ。」

「…………裏人格？…………」

「皆さん、はもり過ぎだって。あ、そうそうあいつは本当にお前らの気持ち分かるぜ。」

「そんなの嘘よ！！貧しい生活でお父さんは蒸発し、お母さんは身体を壊した過去を持つ私の気持ちは、分かるわけじゃない。」

「残念だが、それじゃーお前のほうが恵まれてるって言えるぜ。なにせ、あいつは2度売られてるからな。」

「それは、私も初耳だ。」

「一度目は、自分の両親に。2度目は病院に。」

「なによ、たかが売られたくらいで。」

「なら、お前は人体実験って知ってるか？24時間監視され、実験され、拳句のためにその苦痛から俺まで作って今を生きてるんだ。」

「それって。」

「表ざたにはなってるが、実際あるんだよ。だからあいつは人の苦痛には人一倍敏感なんだ。あと最後に言っておくがあいつの考えるお金よりも大事なものって何だと思う？」

「やっぱり命？」

「俺ならそう答えるがあいつは違う。あいつが“友情”だ。」

「そんな、友情だなんて。」

「そんな風に思ってるのはお前だけだぜ。」

「え？」

「喜界島と金どっちが大事だ？」

「「お前」」

「ほらな、金なんてその程度のものだ。」

そういつて、俺は喜界島にキスをする。つて、あいつバランス崩しやがって。仕方ない、

「おおおおおっ！これは！両者同時に着水だあーっ！！」

「うんでもその前に。樹がいいこと言いながらちやっかり競泳部のハチマキ奪ってたね」

結果、一位 剣道部

二位 柔道部

三位 生徒会

四位 競泳部

．．．．

「そんなわけで先日のイベントは成功に終わった。しかし私が学校行事において私財を投じたことについて批判が多かったのも事実である」

「さすがに先生から叱られたしな」

「その通りだ。確かに公私混合はよくない！よって今後そんなことのないよう生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした紹介しよう。」

そう言うと言って来たのは

「これから会計職を任せる喜界島同級生だ！競泳部からのレンタルなので大切に扱うように」

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばしますからそのつもりで！」

これには善吉や阿久根もビックリだ。

「ちなみにレンタル料は1日280円だ！」

「（原作より安くなってるし。これじゃーす。屋の牛井と一緒にじゃん。ところで、なんで喜界島さんはボクの方を見て、顔を赤くす

るのだろっ？あの二人のボクの方を見て、ニヤ付いてるし。よし、
あとで拷問だ。あつちやん」

その後、ボクは大事なセカンドキスを無意識の間に失ったことを
知ったのは言うまでもないだろう。

金で買えないもの？それは、命と友情だ 下（後書き）

作者「やっと終わったー。って二人とも？」

裏「金で命は買えないぜ。」

表「友情だつて買えないよ。」

裏「友情なんてそんな薄っぺらいものにすぎているようじゃまだまだだな。」

表「友達なんていないくせに。」

裏「友達は裏切るためにあるんだ。」

表「そんな事いって本当はほしくせに。」

作者「あのー二人とも。」

表&裏「うるさい（うるせえ）」

作者「すみませんでした。」

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ！！（前書き）

学校ってこういうこと厳しいですねー。正直めんどくさい。

→

これ本音

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ！！

水中運動会も終わり、最近生徒会は普通である。まーめだかちゃんがいる時点で普通ではないが。あつたことといえば、善吉が、喜界じm

「言わなくていいから。」

善吉は、あの一件でトラウマになったらしい。めだかちゃんは、見てくれで貴界島さんを見るなら金取るか……。ボクだったら、つてボクは男だった。そういえば、運動会の後、剣道部に空飛ぶ美少女がいると噂になっている。でも、剣道部に女子部員はいないから誰なんだろうね。

と言うわけで、今ボクは校門の前だ。そういえば、このころ風紀眼を持っている鬼瀬さんの登場か……。って言ってるそばから鬼瀬さん登場！！

「校則違反です！！」

また、犠牲者？が……。

「あなたがたの外装には正しい部分がひとつありません。服装の乱れは心の乱れ。よってあなたがたの心は乱れきっております！！

風紀委員会所属のこの鬼瀬針金の目が黒いうちは。あなたがたのよ
うな風体の生徒は一步たりとも校門を通らせませんよ！」

つまり、鬼瀬さんの目が白くなれば許してもらえるのかー。（絶
対ないな。）

鬼瀬の言葉に止められてる生徒からは、「だって・・・」や「あ
れだしな・・・」などと言った言葉が聞こえてくるだけだった。

「なんですかその態度は！口答えは許しませんよ！」

ボクの意見としては、口答えでなく言い訳だと思うが・・・。つ
ま、関係ない、関係ない、僕の服装も関係ない。

「いや風紀委員さん、そりゃあんたの言う通りかもしれないけど、
だったらあいつはどうなるんだ？」

「あいつ？」

誰だ、あいつって？嘘であると信じているが。っと思ったら違う
人か。もしもボクだったら密告者を殺めてしまおうとこだった。

ちなみに、あいつとはめだかちゃんのことである。。これには魂
が飛び出るほど驚いたのか、鬼瀬さんは停止してしまった。

「ボクは、部外者だ。」

そう言つと停止している鬼瀬を無視してゾロゾロと学園に歩みだ
した。いつまでフリーズしてるのだろう？

「一体！何を考えているのですか生徒会は！！」

フリーズ状態（約1時間）から、復活した鬼瀬さんはすぐに生徒会室に怒鳴りこみに来ていた。

「生徒の範たるべき生徒会役員が一体どんな魂胆があつて率先して風紀を乱しやがるのです？」

鬼瀬の怒鳴りに善吉と阿久根はやべーという感じで、めだかはどこ吹く風でもがなは我関せず、ボクは部外者を装った。（実際部外者だが）

「人吉善吉くん！それにニタ子樹君！どうして制服の下にジャージを着ているのですか！まさかオシャレのつもりじゃないですよね！？」

「いや・・・、そろそろ時代が俺達に追いついてきたかと・・・」

「断固して違います。」

この瞬間、ガラスの割れたような音が2回鳴った。

「阿久根高貴さん！たとえあなたがエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンだったとしてもその大胆さはありえませんか！！」

簡単に言つと胸元を露出させている服装。でも、阿久根先輩はエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンではなく、めだかちゃんの熱烈なファンであるから許されるであらう。

「誰のファンでも許されません。」

この人にも心読まれた。この世界では読心術が当たり前なのか。恐るべし箱庭学園生。

「そしてそのソロバン弾いてる人！もとい喜界島もがなさん！あなたは何を『あたしには関係ない』みたいに構えてるのですか！？」

「だってあたしには関係ないもん。制服改造なんてしてないしスカートだってフツートの長さだよ？」

喜界島さんの言う通り見た目は何にも問題ないのだが、

「は！あー！ー！ん？そんなこと言っても私の目は誤魔化されませんよ！」

そう言いながら、鬼瀬さんは持っていた手錠を喜界島さんに投げつける。すると、見事水着が見えてきた。

「ほあーら！あなたが中に水着を着込んでいることくらい私の風紀眼にはお見通しなんです！！」

ナルトの写輪眼かって言うの。

そしてしばらくたつと善吉とボクは普通の生徒会の服装に戻り、もがなは水着を脱いだ。しかし力が出ないらしくふるふる震えている。喜界島さんは、水中戦は、最強だが水着がないとダメ人間らしい。

「すみません鬼瀬さん、水着だけになるといのはダメですか？」

「ダメに決まってるでしょう!？」

「肅清は終わったか？」

こんな事をやってると見計らったようにめだかちゃんが話し掛けてきた。

「まあその辺で許してやってくれ鬼瀬同級生、皆決して悪気があったわけではないのだ。」

「あ、いえ、生徒会長!こちらこそ職務中にお邪魔いたしました。それではこれで失礼させていただきます!」

「うむ、委員長によろしくな!」

そう言うつと鬼瀬はすたすたと歩いて行ったがすぐに戻ってきた

「ってそんなわけないでしょー!!」

そっいいめだかちゃんの机を殴り粉碎させた。

ナイスノリ突っ込み。そして怖いよ、鬼瀬さん。

「一番問題なのはあなたです生徒会長。その恥ずかしい制服以上の悪気がこの世のどこにありますか！」

「恥ずかしい？ふむ、また随分と的外れなことを言われてしまったものだ。」

ボクらは潔いのに、ここまで掛け合うとはさすがめだかちゃん。

「この黒神めだか。己が肉体に恥じる箇所などひとつもない。」

そして、二人とも話しかみ合わせて！！

めがかがいつものように凜として言うが全然話がかみ合ってなかった。

「肉体は恥じなくとも服装は恥じてください。そんな胸元を露出させてはしたない。」

「これは胸元を露出しておるのではない胸元以外を隠しているのだ。」

「基本全裸なんですか！？はあはあ、もう」

ついに呆れられた。まー仕方ないか。

「今回はこれで帰ります……、とはなりませんよ！！だいたい一番の問題はあなたです！！その服装を真似する生徒が現れたらどうするんですか？」

「真似？させればよいではないか。むしろ私は任期中には女子の制服をこれで統一しようと考えておるぞ。」

「とんでもねえこと企んでやがります？」

「うーん、さすがのめだかちゃんもちょっと押されてますね」

「フツ、虫だな人吉クンこれはいつものパターンじゃないか。ここからめだかさんの名ゼリフが出てくるんだって！鬼瀬さんはもとより俺達でさえ唸らされてしまう名言がな。」

「（いや、これはダメなパターンだと思いますが・・・）」

「とにかく着替えてください黒神さん！それとも着替えたくない合理的な理由でもあるんですか！」

「・・・・・・・・・・とにかく嫌だ！」

このキツパリ言っただけの言葉に鬼瀬は絶句、後ろのボクらは壁に手をつけていた。それから破壊音が響いた。鬼瀬さんにとって手錠がメリケンサックらしい。っと言うより生徒を取り締まる人が生徒の迷惑をかけるなど、全くひどい話だ。（生徒の模範となる人がこれだと言うことも問題だが。）

きつとこのころが、生徒会VS風紀委員会の序幕なのだと思う。

最後に鬼瀬さん、手錠はメリケンサックでなくこうやって人を捕

まえるためにあるんですよ。

服の乱れは心の乱れでなく、乱れるのは自分のセンス故だ！！（後書き）

こうやって、って言うのは次回に繋げるためです。きっと・・・

手錠の取り扱いには注意するよつに！！（前書き）

作者「テストで投稿が遅れました。本当にすいません。」

樹「結果は・・・ドンマイ」

作者「うるさい、この女装の達人め。」

樹「何それ、太鼓の達人みたいだね。一緒に殺^{あそ}びましょうか。」

作者「バイバイ、俺」

手錠の取り扱いには注意するよつに！！

第25部を見てくれた方の中に気付いた人もいるだろう。そう、ボクは今手錠により拘束されているのだ。なぜこうなったのかと云うと

く回想く

「今日は、鬼瀬同級生からの呼び出しがあつた。場所は旧プールだそうだ。」

「また、服装の取り締まりか。」↑善吉

「また、プールか。」↑阿久根先輩

「また、鬼瀬さんか。」↑ボク

「」「鬼瀬さん（同級生）に失礼だぞ。」↑めだかちゃん＆善吉＆阿久根先輩

「だって服のセンスが分かってないじゃないですか。」↑ボク

「確かに。」↑善吉

「ホントあの女むかつく。」↑もがな

「しかも、『手錠メリケンの鬼瀨』って呼ばれているらしいですよ。」

「ホントあの女むかつく。」
↑もがな

十分後

「しかも、委員長自らスカウトしたという本年度風紀委員会の肝入りですよ。」↑ボク

「ホントあの女むかつく。」
↑もがな

さらに十分後

「さらに、風紀のためには暴力も辞さない強引なスタイルで彼女
 が取り締まりを行うようになって以来、校則違反者は激減したと言
 いますからね。」↑ボク

「ホントあの女むかつく。」
↑もがな

「
「
「
・
・
・
・
・
」
」
」
↑ 他の三人

「そればk「ガチャッ」??」

「樹、貴様を『鬼瀬同級生への暴言、及び我々三人を二十一分三十七秒空気化させた罪』により逮捕する。」

「異議なし。」

「知らないよ。しかもそんな罪ないでしょ!!」

「追加『^{さい}う罪』。」

「うまい！座布団一枚。・・・じゃなくてめだかちゃん、キヤラ変わり過ぎだから。っていうか、この手錠、鬼瀬さんのじゃん!!」

「借りた。」

「これは、借りパクって言う、立派な犯罪だからね。」

「まーよいではないか。それでは、旧プールに移動するぞ。」

「えっと、ボクはどうなるの?」

「もちろんこのままで。」

く回想終了く

って、ボク悲しすぎるでしょ!!しかし、ここは目を瞑っというやろう。うん、ボクって大人だなー。

「樹は、まだまだ子供だぞ。」

そーでした。この世界では読心術が当たり前でしたね。もー怖い怖い。

そして、ボクらは旧プールに到着！！そして鬼瀬さんも登場！！

「例の屋内プールが完成して以来こちらの古いプールは放置状態だったがゆえにすっかり雨水がたまってしまっておるな。しかし、さっきの今で私をこんなところに呼び出したのはどういっつもりだ、鬼瀬同級生？」

「ちなみに、この手錠は・・・」

「言っておくがこの制服を正す気はまったくないぞ。」

「え・・・あ、うん。」

「完全無視！！！！」

めだかちゃんが先に釘をさすと鬼瀬はドキッとしていた。

「えー実はですね、目安箱の投書が何かの手違いでついさっき風紀委員会に届きましてそれをすっかり読んでしまったところ匿名希望の方がとても大切なものをなぜかこのプールに落としてしまったそうでそれを探して欲しいらしいです。出来る限り早く見つけないと水に解けちゃったりするかもしれないので学園を愛する仲間としてこの一刻を争う状態をなんとかしても黒神さんにお伝えしなければと義侠心にかられたのです！！！！」

「（まずい、噴出しそう。なんと見え透いた嘘を付いてんだろ。笑うなボク、これは鬼瀬さんの作戦であり演技なんだ。」

ちなみに作戦とは・・・

偽りの投書でめだかちゃんを旧プールに呼び出して作業させるために水着に着替えさせ、その隙に鬼瀬さんが通常デザインの制服と取り替えるというもの。にしても鬼瀬さんの演技下手すぎでしょ。

「さあ私にできることはここまです。どうなさいますか、黒神さん？」

「ふむ、よく分かんがまあよく分かった。」

そう言つて扇子を閉じ、鬼瀬さんの思惑どおり着替えに

「それでは早速目安箱への投書に基づき生徒会を執行するー！」

行かなく制服のまま汚れた水の張ったプールに飛び込んだ。・・・
・な、なんでボクまで一緒に？？しかも、今ボクは手錠のせいで手は後ろで動かせない状況なのに。

これには鬼瀬さんはビックリし、口が全開まで開けている。

これにはボクもビックリし、口が全開まで開いている。（否、水中なので正式には開けただけど。）

「な、何をやってるんですか黒神さんー！」

「もちろん探し物だが。」

めだかちゃんに対して必死になって言う鬼瀬さんだったためだか
ちゃん不思議そうに鬼瀬さんを見た。（ボクはいま水中なので、
原作知識より判断。）

「じゃなくて服。 そんな汚い水に浸かったら服がダメになっちゃうじゃないですか。」

「それがどうした？この一刻を争う状況で訳のわからん事を言う
でない。乱れようが汚れようがたかが服だろうが。」

^{あたか} 恰も当然というばかりのめだかちゃんに鬼瀬さんは思わず呆然と
してしまった。

「おっとそう言えば落とし物が何なのか聞いてなかったな。 鬼瀬
同級生、大切なものとは何なのだ？」

そう聞かれ、ハツとなった鬼瀬は下を向き歯を食いしばるとプー
ルに飛び込んだ

「…………私の良心。 おかげさまでも見つかりました。」

「…………そうか。 水に溶ける前に見つかってよかったな。」

こうして今回の騒動は終結した。 なんていい終わり方なんだ。 ボ
クも見なかった。

「って言うか、前々から思ってたんですがこの手錠、重すぎでしょ……」

「えええええっ！？黒神さん、スピアの制服7着も持ってるんですか！？」

「なんだ貴様はスピアを持っておらんかったのか？では明日からどうするつもりだったのだ？」

「えーとボクもどうしてくれるんですか？」

「なんだ樹？まさかこのプールの中を私1人で探させるつもりだったのか？」

「つと言つか、一人で見つけたじゃないですか。」

「まあ安心しろ鬼瀬同級生。私は困っている者を決して見捨てたりしないぞ。」

「またも完全無視！？」

「大丈夫だ、樹のことも手は打つてある。」

そして次の日、校門の前は昨日以上に騒がしく違反者でないものまで集まっていた。

その理由は・・・

いつもの通り鬼瀬さんが取り締まりしているのだがその格好がなんとめだかちゃんの制服を着ていたのだ。本人はとても恥ずかしそうにしていた。

そしてボクはというと・・・

「畜生！樹のやつ。」

「なんで朝っぱらから善吉は泣いてんの？」

「死んじまった。」

「善吉、今日はエイプリルフルじゃないよ」

「昨日旧プールに入ってたつきり見てないんだ。」

「昨日の事故って樹のことだったんだ」

「俺を置いて死ぬなよな、樹。」

「誰が死んだって？」

「い、樹！！んなわけないか。」

「いや、ボクは正真正銘ニタ子樹だからね。」

「じゃあ、なんでその服装なんだ？」

「昨日、濡れたからめだかちゃんに今日だけ貸してもらってるんだ。」

「あひゃひゃひゃひゃ　樹、その服装似合ってる」

「今日、めだかちゃんにも言われた・・・」

「樹、大丈夫だ。お前なら絶対に女装してもばれないぞ。」

『それ、ほめ言葉のつもり・・・』

「いや、これはその『言い訳するんだ。』やめろーーーーー。」

「あひゃひゃひゃひゃ　樹サイコー」

この日、昨日の事件の他に、謎の転校生（女子）と死んだ少年の亡霊が出るという噂話が広がった。

『女子の転校生って誰かな？』

「たぶん、その服を着たお前のことだと思うぜ。」

『あれ？ストレス発散機って、しゃべるのかなー？』

「バイバイ、俺。」

樹「また投稿、遅れてんね(笑)」

作者「……………すまぬ。」

樹「また文才、死んでるね。(笑)」

作者「……………ごめん。」

樹「また髪、薄くなつたね。(笑)」

作者「……………悪かった。つてことあるかああああ！！！！！！
！さつきから俺の悪口言いすぎだ！！！！(最初2つは事実だが。)」

樹「ほら、認めた(笑)」

作者「でも、ラストは何なんだ？俺はまだ10代真っ只中の一人の
健全な学生だぞ。」

樹「悪かった、悪かった。さつきのは嘘だよ。だから訂正。」

最近影、薄くなってきたね。」

ボキッ！！
↑心が折れた音

正義正義って言うけど正義がいつも正しいとは限らない 上

音楽は 精神の中から日常生活の塵埃を掃除する

byヨハン・ゼバスティアン・バッハ

つと言つ名言があるがボク達は今、掃除後の音楽室を見ている。

最近、オーケストラ部の演奏が騒音問題にまで発展しているそうなんだ。つまり、

「生徒会を執行する!!!」

ってかんじでボクらは音楽室へ向かっている。まー部員や部室の検討は付いているけどね。ちなみに、途中であの鬼瀬さんにも会っている。目的はタオルを風紀委員長に届けるそうなので一緒に行くことにした。・・・もがなさんの殺気、怖い。

「ギャーーーーッ!!」

「いやーーーーッ!!」

「助けてーッ!!」

「help usーッ!!」

「「「「「.....」」」」」

ちなみに、これは生徒会の驚きであって音楽室がとうとう無音になっただけではない。

「うむ、確かにうるさいな。」

「「「「これは、悲鳴だ。（です。）!!!」」」」

「では、誰の仕業だ？」

「きっと風紀委員長の雲仙冥利くんじゃないですか。」

「「「風紀委員長???」」」

「風紀委員???」

そういつて、鬼瀬さんを睨む。マジで、怖い。

「もがなさん、一人だけつつこむとこ違うから。」

「あの女むかーもういいから。前作からちよつと使用頻度増えるよ、それ。」・・・むk「shat up!!!」・・・m「えーと、愚痴は一文字千円にしようかな?それとも・・・」すみませんでした!!」

「そんな話は置いて、他の4人は？」

「いませんね。」

「つまり・・・」

「つまり・・・」

「・・・Let's GO!!!!!!」

なんとというコンビネーション。今思うと、このときのボくら二人の息のぴったりさはシンクロ金メダリストも凌駕すると思われた。
(ただの幻想に過ぎませんが・・・)

そして、ボクはしっかりと掃除された音楽室を見た。そう、掃除。いや、この場合は総除が正しいでしょう。部員全員が除かれていた。穴が開いているオーケストラ部の楽器、さっきまで生きていたであろうオーケストラ部の部員達。

「死んでるか不安か？大丈夫だ。しっかりと生きてるぜ。お、鬼瀬ちゃんじゃん。タオル持ってきてくれたんだ。サンキュー。」

「あ、は、はい(え・・・なに？なんですか、これ？一体何を使えばこんなことができるんですか！？)」

「まったく・・・オレは本当にダメだなー。返り血まみれなんていつものことなのに、いっつもタオル忘れちゃうんだよなー。で、なに、黒神めだか？なんでテメーがここにいるわけ？」

めだかちゃんが雲仙冥利にオーケストラ部に来た理由を話たら雲仙が言い放った。

「甘えんだよ！話してわかるか！事情なんか知るか！！ルールを破った 奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをボクせば事情さえあれば許してもらって同じことを繰り返すに決まってるだろーが！やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！それがオレのポリシーだ！！」

「（・・・そう。私は、そのポリシーに賛同して風紀委員会に入っただ。でも、さすがにこれは・・・やり過ぎ過ぎる！！）」

「おいおい、そのエアオツパイ！オレ達風紀委員会があくまで平和を愛する正義の集団だぜ？不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ。そのための暴力も武装もただの手段に過ぎねえ。もちろん黒神！！テメエーと敵対するつもりも、テメエーの率いる生徒会執行部と敵対するつもりも・・・ある！！」

正義正義って言っけど正義がいつも正しいとは限らない 下（前書き）

樹「今回のボク、なんだか空気化している気が・・・」

注意 これは前回の作者の恨みのせいではないと思われます。

樹「なに、その中途半端な言い方。」

注意 これは前回の作者の恨みではないと願います。

樹「決定！！執行猶予なしの死刑判決だよ。」

作者「うわああああああ！！」

正義正義って言っけど正義がいつも正しいとは限らない 下

今、冥利委員長が生徒会に宣戦布告を申し上げたということは、本格的に生徒会VS風紀委員長が始まるのだろ。う。っと言っかすでに戦いの火蓋が落とされていた。雲仙委員長が宣戦布告後、何かを飛ばしめだかちゃんの左額辺りに当たってた。

「……………？おかしいな。今のは挨拶代わりだぜ？見えねーまでも避けれるくらいの手加減はしたつもりだけど？」

「……………貴様から攻撃される理由がない。ゆえに避ける理由がない。」

「……………いや、避けたほうがいいんじゃない？仕方ないか……………なら」

めだかちゃんは何事もなかったかのようにケロッとした様子だ。これを見た雲仙は面白そうにしていた。

「へえ、面白いこと言うじゃん……………もっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよ！！」

雲仙が腕を振ると今度は下から何か顎をかち上げたしかもさっきより全然速く勿論威力も高い。

「ケケッ！貴様から攻撃される理由がない。ゆえに避ける理由がない。言ってやったぞ、褒めるがよい。」

「（こりやすげえわ。ありえねー。心身ともにバケモンだぜ黒神めだか！！）」

「や、やめてください委員長！黒神さんの言う通りです！今生徒会と敵対する理由なんかないじゃないですか！！」

居たんでしたね・・・気付かなかった。（まーボクも人の事言えませんが）

「理由ならあるじゃねーか鬼瀬ちゃん。いつの時代も正義は聖者を弾圧するモンだろ？」

「ふざけないください！これ以上の暴力行為は1人の風紀委員として見逃せません！！」

「ケケツ！このオレ相手に随分と言ってくれんじゃん。好きだぜーオレ、鬼瀬ちゃんのそういうトコ！

だけどやっぱり理由はあんだよ。ここで会ったのはただの偶然だがここで会ったが100年目、正義と聖者は相容れねえどっちかが潰れるしかねーんだよ！！」

・・・これは子供のいうことじゃないですね。

「黒神！テメエーのスタイルって上から目線の性善説とか言われてるらしいじゃん。だったらオレのスタイルは見下し性悪説だ！テメーが花を育てる側ならオレは芽を摘む側なんだよ！！」

それは、正義とは言わないが。

「確かに私と貴様では主義が違うようだが、しかしそれは話し合

いで解決できるレベルであろう。敵対する理由は変わらずないぞ。」

「ケケケッ！とことん上から目線だな黒神！だけでもうそんなレベルじゃねーとオレは思うぜえ？
なんせオレは

生徒会潰しのための

刺客を既に放つちまってるんだからなあ！！」

「！！！！！！」

「テーマみたいな奴にはこういうのが1番効くんだろ？ほら、もっぺん同じコト言ってみな。それができたら褒め殺しにしてやんよ！」

雲仙委員長が愉しそうに笑った。

「…………やれやれ愚かなことをしてくれたものだな。」

「あ？」

「不知火ここは任せたぞ。」

「はい？」

「ボクからもよろしく頼むよ。今度、おごるなりなんなりするか
らさ。」

ボクも今回の件は、少々きれてるからね。っと言いながらも正直
怖いんですけどね。

「相変わらずだな。こんな時でなければ真っ先に抱き着いていた
ものを。」

「・・・ボクをそんなに殺したいですか？」

そう言い駆け出したが勿論めだちゃんが黙って行かせる訳が無
かった。

「あゝ！？どこ行こうってんだよ黒神！

お仲間を助けに行こうってか！？ 今からこつから間に合うワケ
ねーだろが！無駄な悪足掻きしてんじゃねーよボケが！！」

そう言い雲仙が俺とめだかにスーパーボールを何個か投げてきた。

「そうはさせませんよ。そんな子供じみた攻撃、どんなスピード
でも本来のめだかちゃんはかわしますからね。」

ボクは、めだかちゃんに向けて投げられたスーパーボールをすべ
て粉碎した。

「！？そうか。やっぱ、お前に向けて刺客を送っというて成功だっ
たわ。結果的に他の三人のところへ行っただがな。」

「残念だけどその刺客を三人のところへは行かせないよ。」

「いいねえ、その聖者っぷり。でも無駄だな。なぜなら、お前に送った刺客は、残りの風紀委員全員なんだからな！」

正義正義って言うけど正義がいつも正しいとは限らない

下（後書き）

次回、入れたら樹の新しい異常を発表する予定です。

聖者聖者って言うけど聖者がいつも人を愛すとは限らない

上

(前書き)

新たな異常、不入^{はいらぬ}。

読者の方々、本当にすいませんでした。

次回こそは・・・入れるつもりです。

聖者聖者って言うけど聖者がいつも人を愛すとは限らない 上

ボクは、雲仙の言葉を聞き、すぐに音楽室を飛び出した。つが、その必要はなかったようだった。明らかに分かる。ボクの視線の先には、大きな山があった。人で出来た山が。

「樹、遅かったな。こっちの始末は全部終ったぞ。」

「ありがとう、めだかちゃん。ところで、他の三人は？」

「まさか、俺らが音楽室を出てから、風紀委員に会うとは思ってなかったぜ。」

そこには、無傷の善吉がいた。

「あのまま、音楽室に残っていればめだかさんにこんな苦勞をお掛けする事もなかったのに。」

「気にするでないぞ、阿久根書記。」

「でも、やっぱりあの女むかつく。」

二人も無傷のようで、ホッとした。

「だから、もう言わないであげてくださいよ。もがなさん。」

「でもあの女むかつく。」

「それでも、鬼瀬さんも生徒会の味方をしてくれたんですよ。」

「でもあの女むかつく。」

『ひらがな11文字だから、1万千円だね。はい、罰金♪』

「すいませんでした!!」

今、ボクら二人しか残っていない。こんな漫才で、また遅れたよ
うだ（笑）

ボクともがなさんも遅れて音楽室に到着した。

「・・・・・・それで、なんの用だ雲仙2年生。」

「おいおいつれねえな。用がなくちゃきちやいえねえってのかい
？」

窓の力ギを閉めながら雲仙は言った。

「まあ仲良くしようぜ黒神1年生。オレ達は怪物同士で、化物ど

うしで、似た者同士なんだからよお！いや、実際テメエが入学してきた時から思っちゃんいたんだよ。テメエとオレは鏡写しなからによく似てるってなあ！」

今度はドアのカギを閉めながら言った。

「残念だけどもだかちゃんは、お前と正反対の存在だよ。」

「おうよ。そっくりだから相容れねえ。」

「だからって、ここを密室にする必要がある？ここにばら撒いたの、スーパーストールじゃなくて火薬玉だよな？」

「なに！？」

「おつとバレたかい？ダメだなーオレって。本当にダメだ！手品下手すぎ。だがまあ遅かったな！仕込みはギリギリ終わってる！！」

つと言ってマッチを取り出す雲仙。

「密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ。」

「そうだ！子供っぽい脅しはやめろ！！」

つともがなさんと阿久根先輩が言う。

「テメエらニュースとか見てねえのか？だっせえな。最近のガキは何考えてつかわかんねーんだぜ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296x/>

異常で過負荷な臆病者

2011年12月14日01時47分発行